

令和4年度（2022年度）チャネルキャットフィッシュ採捕状況

石崎大介・山本充孝

1. 目的

近年、県内において特定外来生物チャネルキャットフィッシュの確認数が増加している。拡散を防止して未然に漁業被害を防ぐために、採捕情報を収集して生息状況を把握した。

2. 方法

県内の漁業協同組合にチャネルキャットフィッシュが採捕された場合には、水産試験場に連絡するように依頼し、漁業者により採捕された全ての個体を回収した。回収した個体は、採捕日、採捕場所、全長、標準体長、体重を記録した。あわせて、水産試験場が実施した調査および滋賀県漁業協同組合連合会（以下、漁連）が実施した駆除事業における採捕個体も同様に記録した。また、一部の漁業者に依頼した漁獲日誌および漁連と水産試験場による採捕データから、延縄の針100本あたりの採捕数（CPUE）を求めた。なお、採捕場所は県内の水域を北湖、南湖、瀬田川洗堰（以下、洗堰）上流の瀬田川（瀬田川上流）、洗堰下流の瀬田川（瀬田川下流）に区分した。

3. 結果

2022年度の本種の採捕数は北湖1個体、南湖10個体、瀬田川上流58個体、瀬田川下流305個体であった（図1）。北湖では2017年度以来5年ぶりの採捕だった。瀬田川下流の採捕個体数は過去最も多く昨年度と比較して倍以上採捕された。南湖や瀬田川上流は昨年度より減少して一昨年と同程度であった。

CPUEは瀬田川下流では過去最高を示したが、採捕数の増加ほどの上昇はみられなかった。また、瀬田川上流は2018年から2020年まで減少傾向で、2020年から2022年は横ばいであった。南湖は低位であり採捕数に同調して減少した（図2）。

瀬田川下流での採捕数の増加は、水産試験場が本年度から天ヶ瀬ダム湖内の本格調査を開始し調査回数などの努力量が上昇したことが考えられる。しかしながら近年当水域のCPUEが高値を維持しているのは当水域の生息個体数が多いことを示唆している。南湖や瀬田川上流ではここ3年は低いCPUEを維持しており2019年度から漁連が実施している駆除事業の効果が表れているものと考えられる。

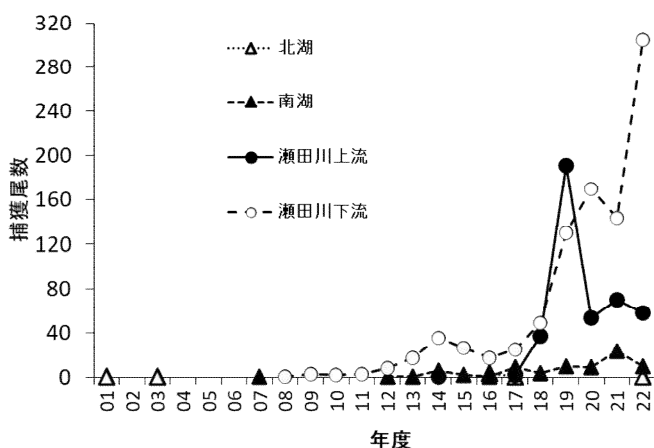


図1 チャネルキャットフィッシュの採捕状況

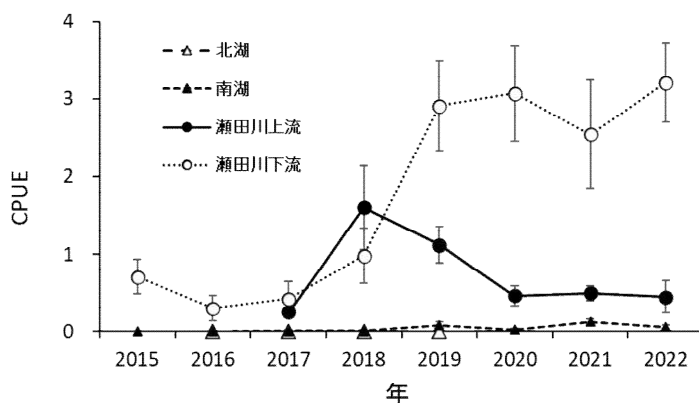


図2 各水域の延縄によるチャネルキャットフィッシュのCPUE